7日間彼氏

里崎　雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７日間彼氏

【Ｎコード】
Ｎ０６５０Ｔ

【作者名】
里崎　雅

【あらすじ】
会社の上司が彼氏のフリ！？酔いつぶれたイケメン上司を、成り行きで一晩泊めてあげた美雪。そのお返しにと、女友達に紹介するために「７日間」だけ彼氏になってくれることに……。この恋は７日間だけで終わっちゃうの？
※本文掲載は１１月８日をもって終了の予定です。その後は番外編のみ残す形になります。

第1話　ありえない姿

「はぁ～…ちょっと酔っぱらったかな」

彼氏のいない自分にとっては憂鬱なだけのクリスマス…
それがやっと終わった週末、街には忘年会帰りと思われるサラリーマンやＯＬが溢れていた。
各々の店先には、はずし忘れたクリスマスの飾りと少し早い正月向けの飾りが、同居してぶらさがっている。
それをぼんやりと視線の端でとらえながら、かすかにふらつく足で夜の繁華街を歩いていた。

藤崎美雪（ふじさきみゆき）、２０歳。

今日は、卒業以来ずっと会えずにいた短大時代の友人との、久しぶりの飲み会だった。
お互い仕事にも少しずつ慣れ、恋も仕事もまっさかりの友人たちとの会話はつきない。
女子トークは数時間にもおよび、とっくに日付は変わっていた。

「それにしても、驚いたなぁ～」

思わずつぶやき、足をとめ繁華街のネオンを見上げた。
短大時代は一番の遊び人で、まだまだ恋も仕事も謳歌するだろうと思われていた理子が結婚だなんて。

『この人を逃したら、次はないってピンときたんだ。彼、年も年だし早く結婚したいみたいだし』

そう言いながら頬を染めた理子は、今まで見たこともないような幸せな顔をしていた。
場は最高潮に盛り上がった。

――結婚はおろか…恋人さえできたことないなんて…みんなに言える訳がないよ。

ちょっと情けない気持ちで、ちびちびと飲んでいると、突然話の方向が美雪に向いた。

「美雪は？どう？どーせオトコいないんでしょう。紹介しよっかぁ？」

中・高・短大、とくされ縁が続いていた友人・瑠璃がいきなり言ってきた。

「えぇっ？なんなのよ、いきなり…」

「アンタ中学高校と叶いもしない恋を追いかけてさ～。卒業式で玉砕してからはすっかり臆病になっちゃって！いまだに処女なんじゃないのぉ？」

確かにその通り。

美雪には未だに彼氏もいなく、いわゆる男性経験はほとんどない。
そうは言っても、大勢の前で話題にされると思わずカチンときてしまった。

「うるさいなぁ！今はちゃんと彼氏いますから」

……タイミングが悪かった。

はかった訳でもないのに、たまたま場が静まったときに言ってしまったようだ。

思いがけず、美雪の発言が部屋に響いた。

「え～、マジ！？短大時代はそばに男がいるってだけで固まってたよね？」

「そうそう、合コン連れてってもむすーっとしててさ。それなりに可愛いのに」

しまった、と思ったがもう遅い。

「ねえねえ、どんな人ぉ～？美雪の彼氏って！」

友人の一人が、目をキラキラさせながら急に話題に入ってきた。

「い、いいじゃん別に…」

「見せたくないほど、イケてないとか？」

「そんなんじゃないけど…」

「じゃあいいじゃん！！今度会わせてよ！」

居ないものを、会わせる訳にはいかない。慌てて酔った頭をフル回転させ、なんとか理由を考える。

「つ…付き合いはじめたばっかりだし…ひ、人見知りする人だから」
「じゃあじゃあ、クリスマスももしかして一緒に過ごしたの？！」
「あー…クリスマスはお互い仕事で…」
「とかいって～。本当に彼氏できたの？ちょっと強がった？」
さすが瑠璃、見すかされている。
でも今さら、後には引けない。
「わかったって！今度連れてくるから！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、再び話は結婚を決めた理子の話題になり、ほっとしていたのだが…
帰り際になると皆に、
「じゃあ今度の飲み会は美雪の彼氏をネタに盛り上がろうね～」
と、しっかり釘をさされてしまった。
（―――どうしよう…）
余裕の笑顔を装って別れたものの、すっかり暗い気持ちになってしまった。
今年のクリスマスイブだって、皆の嫌がる残業を引き受け、家に帰った時には日付が変わっていたくらいだ。

いや、今年のクリスマスどころか…ずっと一人か女友達と過ごしている。
彼氏はおろか、男友達だっていないのに。
はぁ…と思わずため息が出たところに、少し先の喧騒が耳に入った。

「大輔〜！オイ！大丈夫か〜？？」

人が行き交う交差点で、道端に座り込んでいる男性が一人。酔い潰れてしまったのだろうか？
少し可哀そうに思いながらもその光景を横目に通りすぎようとした時、座り込んだ男性の顔を見て驚きで足が止まった。

「しゅ、主任！？どうしたんですか？！」

間違いない。
電信柱を背に、座り込んでいるのは…美雪の直属の上司である松沢（まつざわ）大輔（だいすけ）だった。

年は確か３０少し前だったと思う。
仕事中はとにかく厳しいし怖いので、気安く声をかけたり側にいけるような存在ではない。
でも、すらりと背が高くてクールで整った顔立ちなので、ひそかにファンという女子社員も多い。
美雪も入社当時はその大人な雰囲気に憧れていた。
でも、直属の部署に配属になり、毎日厳しく指導されるようになってからは、怖いというか緊張する存在でしかなくなっていた。

その上司が…普段のクールな姿からは考えられない状態で、座りこんでいる。

ありえない姿だった。

第2話　引き受けました

「ん…？君、大輔の知り合い？」

松沢の側で介抱していたと思われる男性が、そう美雪に聞いた。

「はい、あの、会社が一緒で…松沢主任は私の上司なんですけど」

「そっかぁ、それは助かった…なんでかコイツ、今日はピッチが早くてさ。普段は酔っぱらうことなんてめったにないのに。
そこの店を出て仲間と別れた後に、座りこんじゃったんだよ」

歓迎会や忘年会で何度かお酒を飲む姿を見たことはあるが、クールに淡々と飲むイメージしかない。
美雪にとっても、意外な姿だった。

「君、あの…」

傍らに座りこんで、マジマジと松沢の顔を覗き込んでいると、その男性が声をかけてきた。

「あ、藤崎です。藤崎美雪と言います。松沢主任の直属で働いています」

「美雪ちゃんね、大輔の家って知ってる？」

「家、ですか？！さすがに知らないですけど…」

そう答えると、その男性は明らかに困った表情を浮かべた。

「なんか少し前に引っ越したみたいなんだよ。俺も他のやつらも、誰もコイツの新しい住所知らなくてさ。
送っていってやろうにも、家がわかんないんだよ」

この年末の忙しい時期に引っ越しとは。
プライベートな話は全くしない松沢なので、そんなことは知るわけもなかった。
当然、同じ部署の誰も知らないに違いない。

「うーん……私はわからないですけど…引っ越しなら、会社に届けは出してますよね？
総務課の人に聞けばわかるのかも…」

「ホント！？じゃあコイツ、引き取ってもらえないかなぁ。明日は土曜だし、うちに連れてってやればいいんだけど…今うちの嫁さん妊娠中で、ちょっとデリケートな時期なんだよね」

ちらりと男性を見ると、左手には指輪が光っていた。
奥さんが妊娠中では、酔っぱらった友達を連れて帰るわけにもいくまい。

「わかりました。なんとかします」

大丈夫だろうかと思いつつも、本当に困ってる様子のその男性を見るにみかねて、そう言ってしまった。

「ありがとう～。あ、俺コイツとは高校時代からの友人で、平岡って言います。
一応、どうしようもなくなったら連絡して！その時は俺の家に連

れていくからさ」

赤外線でお互いの連絡先を交換して、その男性はこちらを気にしながらもどことなくイソイソと帰っていった。

「いいなぁ…家庭を大事にする人って」

思わずつぶやいてしまう。
家庭を大事にするどころか、その家庭すらもっていないのだけど。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「参ったなぁ…どうしよう」

平岡と別れてから、ゆうに30分は過ぎていた。
浅はかだった。どう考えても。

一度会社に電話してみたものの、この時間では守衛さんしか残っていなかった。
当然、彼にイチ社員の連絡先などわかるわけもなく、一部のお偉いさんのものしか知らないようだった。

総務課の同期の知り合いに電話をかけようとして、ふと気付いた。
もうすでに帰宅している彼女に、別の課の人間の住所などわかるわけなどない。
逆に変に思われて、あらぬ噂を流されては入社1年目の新人には生きていけない…。
それが、ひそかに皆の憧れである松沢主任の住所とくれば、下手すればストーカー扱いだ。

「どうしよう…主任、しゅーにーん！！起きて！起きてくださーい！！」

さっきから何度も何度も呼びかけてはいるものの…聞こえているのかいないのか、松沢は目をつぶって電信柱を背に座り込んだままだった。

日付はもう変わっている。
人通りもだんだんまばらになり、このままだとタクシーも拾えなくなってしまうかもしれない。
何より…アルコールをたくさん飲んだせいで、さっきからトイレに行きたくて仕方なかった。

先ほどの人に連絡をとることも考えたが、奥さんが妊娠中となると、こんな夜遅くに女の自分が電話することもはばかられる。
なんとかなるだろうと、気易く引き受けてしまったのは自分なのだ。

“すべての物事に、責任を持て”

入社したての時、そう松沢に指導されたことをぼんやりと思いだした。

仕方ない。
とりあえず自分の家に連れていこう。

幸い自分のマンションはここから近く、タクシーで行けば、5分もかからないだろう。
意を決してタクシーをとめ、運転手の力を借りて無理やりタクシー

に押し込んだ。

「近くて申し訳ないんですけど…△△までお願いします」

「はいよ。男前の彼氏、飲みすぎちゃったのかい？」

「はぁ…」

彼氏、という単語にドキっとしてしまう。
なんとなく落ち着かないが、訂正するのも面倒だった。
ふと自分にもたれかかっている松沢を見ると、仕事中は見たこともないような幼い顔ですーすーと寝息を立てている。

彼氏…だったら、ジマンだよなぁ。こんな素敵な人。

「ん…」

ふいに低くてハスキーな声が耳元で聞こえ、不謹慎ながらドキっとしてしまう。

「だ、大丈夫ですか？」

慌てて声をかけてみたものの、返事はない。ほうっと息をついた。

お酒を飲んでるせいか、なんだか身体が熱い。
改めて盗み見るように、松沢の顔を見つめた。
３０くらい、と勝手に思っていたけれど、こうやって見てみるともう少し若い気がする。
お酒の匂いとは違う、整髪料のような男っぽい香りが美雪の鼻をくすぐっていた。

こんなに近くに、男性の存在を感じたことはない。
ドキドキすると同時に、自分に寄りかかる温かい重みに心地よさも感じていた。

（彼氏って…こんな感じなのかな…）

ふいに先ほど交わしてしまった約束を思い出し、一気に憂鬱な気持ちが襲う。

———忘れてた、彼氏をみんなに会わせるって約束。

こんなことしてる場合じゃないのになぁ。

タクシーの窓を流れる景色を見ながら、またひとつため息をついた。

第3話　酔っぱらい上司

とてもいい運転手だった。
１８０近くあるだろう松沢を美雪が１人で運べるはずもなく、玄関まで運ぶのを手伝ってくれた。

松沢は、時折

「うーん…」

「悪い…」

などとは言うものの、自分の置かれている状況は全く理解してないようだった。

「こ、ここです…ありがとうございました…」

二人がかりで、といってもほとんど運んでくれたのはタクシーの運転手だったけれど、なんとか美雪の部屋の前までたどりついた。
疲れた。思わず息が切れた。

「本当に…どうもすみませんでした」

「いいよいいよ、あんまり飲ませすぎちゃだめだよ～」

松沢を玄関を上がったところに横たえ、運転手は帰っていった。

とりあえず急いでトイレをすませ、あらためて玄関先で眠る松沢を見つめてしばし呆然としてしまう。

この家には、引っ越しの時に業者が出入りした以外は男の人を入れたことはない。
彼氏どころか、男友達さえなかなかできないのだから。
それが、なぜか社内でも指折りのイケメン上司が寝ている。
朝、家を出る時には考えられなかったこの状況。なんだか不思議でたまらなかった。

「しゅにーん！主任！まだ目、覚めませんかぁ～？」

ダメ元で呼びかけてみると、部屋の灯りにまぶしそうに目を細めながらかすかに松沢が反応した。

「ん……藤崎…？んあー？」

「んあ～、じゃないですよ！起きてください！風邪ひきますよぉ～」

のっそりと起きあがった彼を見て、美雪は少しドキドキしていた。

（やっぱりみんなが騒ぐだけあって、かっこいいな…。仕事中は怖くて、ろくに顔見れないんだもん。
なんだかかわいいかも…）

「お水、飲みます？」

「おぉ…ここは、どこだ？」

「え？あ…私の家ですけど」

急にドギマギしてしまう。
松沢は酔いつぶれていたから、ここに来た経緯などほとんどわから

ないのだ。
変な誤解をされては困る。
「あっあの、主任が酔っぱらって道端に座りこんで、平岡さんが家に連れていけないって困ってたから、私が仕方なくですね！」
「平岡…なんで藤崎が平岡のこと知ってるんだよ」
「なんでって…」
なんといっていいかわからず、言葉に詰まっているとゆらりと松沢が立ち上がった。
「しゅ、主任？大丈夫ですか？まだ座ってた方が……うぎゃっ」
女の子相手とは思えない、手加減のない力強さで顔をがっちりと挟まれていた。
「ひゅ、ひゅにん…いひゃい…」
「なんで、平岡のこと知ってるんだよ。お前……今日…誰といたんだ？」
「ひょ、ひょっとまって…」
酔っぱらいだけに力の加減がない。痛い。
「い、いひゃい！ひゅ、しゅにん！！」
なんとか自分の頬から手を振りほどいたものの、松沢は納得のいか

ない顔をしていた。

「…なんで俺が藤崎んちにいるんだ？」

「だっ、だからですね、主任が酔っぱらって道端で座り込んでいて…」

「まあいいや。トイレ…トイレここか？」

よろよろと立ちあがり、トイレに入っていた。

バタン、とドアの閉まると、どっと疲れが出た。

「もう…なんなの？仕事中はあんなに冷静でクールなのに…」

――――でも…これからどうしよう？

目が覚めた以上、ここにタクシーを呼んで家に帰ってもらうのが一番だろう。

一刻も早くスーツを脱ぎすてて部屋着に着替えたかったけれど、同じ部屋に男性が、しかも上司がいるとなるとそうもいかない。

（なんか…面倒なことになっちゃったなぁ…）

そう思いながらキッチンで水を飲み干し、松沢がトイレから出るのを待った。

…3分。

……5分。

……10分。

いくら待っても、出てこない。

――――もしかして、気持ち悪くて吐いてるのかもしれない…

相当飲んでたみたいだし…ありえる。

大丈夫かな？

心配になって、コンコンとトイレをノックした。

「主任？大丈夫ですか？」

返事がない。

しばらく考えた後、もう一度声をかけた。

「あの…開けますよ？」

鍵がかかってなかったのが幸いだった。ためらいながら、そっとドアを引いた。

「うぎゃっ！！」

ドアを開けると同時に、松沢の大きな身体が倒れてきた。

「……あ～！もう！……寝てるし…」

そこには、ドアにもたれかかるようにすやすやと眠る松沢がいた。

もう諦めた。

今日はこのまま自分の家に泊めて、明日起きたら事情を説明しよう。
このまま酔っぱらった松沢に話をしても、理解してもらえるとは思えない。

それが一番いい。
というか、美雪にはそれしか案が浮かばなかった。

松沢の大きな身体を、ずりずりとなんとか部屋までひきずった。

（服も脱がせた方がいいのかな…このままだと皺になっちゃうし…）

スーツのボタンを一つ、二つとはずし、女性とは逆の開き方に気づいて少し驚いた。
当たり前のことなんだろうけど…自分の男関係の無さに、ほんの少し情けない気持ちになる。

なんとか上着は脱がせたものの、それ以上は自分には精神的には肉体的にも無理だった。

（もういいや…このまま寝てもらおうっと）

１ＬＤＫの部屋の中央に布団を敷き、またしてもゴロゴロと転がしながらなんとか松沢を寝かせた。

「はぁ…おもいっ…なんで…こんなことになっちゃったのかな…」

思わず独り言がでる。
多少はみ出してはいるものの、なんとか松沢を布団の上に運ぶこと

に成功した。

ようやくスーツを脱ぎ楽な部屋着に着替え
（明日の朝に顔を合わすことを考えて、買ったばかりの可愛いめのスウェットにしたのは言うまでもなく）
電気を消してベットにもぐった。

男の人と…（仕方なくとはいえ）
夜に同じ部屋にいて…（布団は違うけど）
一緒に眠ってるなんて…

と一瞬緊張はしたものの、すーすーと静かな松沢の寝息に、思わず自分が恥ずかしくなる。

（…もう寝よう…今日は疲れた…）

横になると、少し目がまわる。
自分もアルコールを飲んでいたことを思い出した。
目を瞑ると、あっと言う間に睡魔に襲われて眠りに入っていた。

第４話　真夜中、ベッドの中で

――――なんだか身体があったかい……まだ暗いけど…今何時だろう？
枕元に置いたはずの携帯に手をのばそうとして、自分の身体の自由が利かないことに気付いた。

「！？」

声に出さずに、でも激しく驚いて身体が固まった。

（な、なんで！？）

改めて確認すると、どうやら自分は抱き締められるような形になっているようだ。
目の前には白のＴシャツ…というのか下着というのか…の胸があり、そっと目線を上にあげると目を瞑ったままの整った男の人の顔があった。

寝る前の状況を考えると、当たり前なのだけど…
それは松沢の顔だった。

（いつの間に！？スーツも…脱いでるし…って、し・下着だけ！？）

首だけを動かしベットの向こうを見てみると、無理矢理脱いだかのようにスーツとＹシャツが散らかっていた。

（ど、どうしよう！って…どうしようもできない…んだけど）

もそっと身体を動かしてみようとしたけれど、自分の予想以上にがっちりとホールドされているようだった。

（もしかして…彼女とかと間違えてるのかな…）

そう思うと、ちくっと胸が痛んだ。
これだけ端正な顔をしていて、背も高くて女子社員の人気も高い。
詳しく聞いたことはないけれど、彼女がいない方がおかしい。

（それだったら…彼女に申し訳ないよね…）

この状況から抜け出さなければ。
起こさないように、なるべく静かに身体を起こそうとした。

「ん…」

やばい！起しちゃった？！

悪いことをしてる訳ではないのに、思わず身体が固まる。
彼女だと思って抱き締めていたのが、自分だと知ったら…きっと焦って離れるに違いない。
それが一瞬淋しいような気がして、慌ててその考えを否定した。

———私、何考えてるの！！ちゃんと教えてあげないと。

「しゅ、主任…」

そおっと声をかける。

「うん……なに…」

眠そうにぼんやりと目を開け、自分を見下ろしてるのがわかる。

「あ、あの…誰だかわかってます？」

「ん…藤崎、だろ…」

意外にもはっきりと自分の名前を言われて、どきっとする。

わかってるんだ。

……わかってる？

わかっててこの状況！？

自分の顔が、一気に熱くなるのがわかる。

「あ、あの…」

「……まだ、眠い…」

ハスキーな声でそういうと、ぎゅうっと胸に押しつけられてしまった。

いや、抱き締められたと言った方がいいのかもしれない。

思わず身体を固くすると、優しくさするように背中に手が回った手がゆっくりと動くのがわかった。

暖かくて大きな手が、なだめるかのように穏やかに動く。

その手の気持ち良さに、自分の身体からゆっくりと力が抜けていった。

（――なんか……あったかくて気持ちいいかも…）

しかし、ゆっくりと背中を撫でていた手が、なんだか下に降りてるような気がした。
気のせいではない。
緩みかけた身体が、再び硬くなる。

ヤバイヤバイヤバイ。

どうなっちゃうの？私。

鼓動が早くなるのがわかる。
懸命に冷静になろうとしてみても、経験がないだけにどうしていいかわからない。
でも、不快な気持ちではなかった。

憧れていた大人の男性、その腕の中にいることが信じられなかった。
だけど…何かに流されているのなら、自分はいいのだけれど、松沢には申し訳ない。

後から、

「なんであんなヤツに手を出して」

って、後悔するに決まっている。

「あ…あのっ」

意を決して呼びかけてはみたものの、返事はない。

冷え性気味の自分よりも、ずっと高い体温。
それは、お酒のせいなのだろうか。
それとも、男の人だから？
この暖かくて大きな手は、何をしようとしているのだろう。
そう考えると、身体の芯が熱くなるような感覚があった。

「…ダメだ…やっぱ…ねむ…」
ふいに手が止まり、半ば寝言のように、頭の上からそんな声が聞こえてきた。

「えっ？」

優しく美雪の身体をなでまわしていた手は今度は腰に回り、ぎゅうっと、少し力をこめて抱き締められた。
思わず固まったままでいると、上からまたスースーと規則正しい寝息が聞こえてきた。

どうやら……寝てしまったらしかった。

（ちょ、ちょっと！！どうなの！？この体勢！…男の人と、上司と、この状況…）

美雪のドキドキなど知る訳もなく、松沢はどっぷりと眠りに落ちたようだった。
まるで、抱きまくらになったような気持ちである。

結局、身動きも出来ず悶々としたまま時はすぎ…
ようやく美雪が眠りにつけたのは空がうっすら明るくなった頃だった。

第5話　目覚めた後は

「おはよう。藤崎」

「んぁ……おは、よう……っ！？」

一気に目が覚めた。

はっと目を開けて状況を確認すると、自分のすぐ隣に横たわった松沢が、肘をついて顔を支えた姿勢で自分を見下ろしてるのがわかった。

「っ……おはようございます……」

あれだけ酔っぱらっていた次の日の朝だというのに、なんだか涼しげな顔をしている。
普段はきちんとセットされた髪が、寝起きで少し乱れて、さらっと顔にかかっている。
そしてその顔は、少し怒っているように見えた。

――私、何も悪いことしてないよね！？

起き上ることもできず、毛布を口元まで引き上げたまま、思わず自分に問いかける。
まるで仕事で失敗した時のような、妙な緊張感が美雪を襲った。

「あのっ、主任、これはですね、この状況はですね！」

「ああ、大丈夫。友達にメールして聞いて大体わかったから」

しれっとした顔で言われて拍子抜けしてしまった。

「友達……って、平岡さんですか？」

「……携帯、何度か鳴ってたけど、もしかして平岡か？」

「え？　携帯？」

慌てて枕元の携帯に手をのばすと、確かにチカチカとランプが光っていた。

メール2件。着信1件。

メールの一つは昨日の短大仲間からだったけれど、残りは確かに平岡からだった。

「あー本当だ……平岡さんからメールと着信ですね」

「なんで平岡にアドレス教えたんだ？」

怒ったような視線を向けられ、何も悪いことはしてないはずなのに居心地が悪くなる。

「え、なんでって……困ったら連絡くれって……」

「アイツも軽いな。俺だって連絡先知らないのに、社外の人間に簡単に教えるなよ」

そういう問題ではない。

そう思うけれど、なんだか言えない。

「そもそも、なんで俺は藤崎の部屋にいるんだっけ？」

さぐるような、相変わらず少し怒ったような顔でそう聞く。

「な、なんでって……だって、主任が道端に座りこんでて……何回呼んでもわかってくれないし、どうしていいかわからなくて」

「連れて帰ってくれたんだ？」

今度はニヤニヤと、なんだか嬉しそうに人の顔をのぞきこんでくる。からかわれているのだろうか。

そう考えると、なんだかムッとしてきた。

「だって！　主任のお友達、困ってたんですよ？家もわからないから送っていけない、奥さん妊娠中だから家にも連れていけないって……。いい大人なのに、何やってるんですか？」

ベッドの上だということも忘れ、思わずまくしたてた。

「へえ。いい大人か。藤崎からそう言われるとは思わなかったなぁ」

松沢は妖しい笑顔でそう言うと、肘をついていない方の手を美雪の頭の後ろにおとした。

「な、何……」

「いい大人なら、どういう状況かわかるよなぁ？」

どういう状況……そう言われて改めて自分の姿を見る。
そうだ、いくら美雪は部屋着とはいえ、下着姿の男性と狭いベットに入っているのだ。
でも……だから？という気もする。
社内でもファンが多くモテモテでイケメンで、大人な松沢が自分に変な気を起こすとは思えない。

そんな事するわけない。

「あの……私なんかにどういう状況と言われても。主任が私なんかを相手に何かをするわけがありません。からかってるんですよね？」

なるべく仕事の時のように、冷静にそう言うと、松沢は黙ってじっと美雪を見つめてきた。

「お前は……もう少し自分のことと、男のことをわかった方がいいと思うな」

どういう意味だろう。
今度はこっちがきょとんとする番だった。

松沢は短いため息のようなものを吐くと、むくっと起きあがった。

「……俺の家、わからないから連れてきてくれたんだろ？　悪かったな。ありがとな」

「いえ……出すぎた真似をしてしまって、すみません。総務の人に聞けば新しい住所がわかるかと思ったんですが、時間も時間だったもので……。私の考えが浅はかでした。申し訳ありません」

思わず、ビジネスライクな口のきき方をしてしまう。
そう、だってこの人は上司なのだから。
自分もベットから起きあがって、きちんと座りなおした。
白いTシャツ姿の松沢を見るのが恥ずかしくて、ぎゅっとにぎった自分の手元を見つめていると、ふと視線を感じた。
松沢が、じっとこちらを見つめていた。
「なんで……俺を、お前の家まで連れて帰ってくれた？」
ふいに真面目な顔で、松沢はそう言った。
「え、だから、さっき……」
「そのまま、放っておけばよかったんじゃないか？」
「それだと……主任のお友達が、困っていたので……」
「それだけ？」
それだけって……なんと言えばいいのだろう。
言葉に詰まって黙っていると、ふいに松沢が近づく気配があった。
「……酔っぱらって困ってたら、お前は誰でも連れて帰るのか？」
「そ！　そんな訳……ないじゃないですか」
「じゃあ、どうして？」
「ど、どうしてって……しゅ、主任……」

気づくと、自分の目の前には松沢の顔があった。
そんなに近くで、こんなに綺麗な顔を見せられたら、頭がくらくらしてしまう。

な、なんて言えばいいのだ。

そう思って目を泳がせていると、

「……ぷっ」

松沢がふきだした。

「藤崎、顔真っ赤。本当、男に免疫ないんだな～」

「ひっ」

やっぱりからかわれていたのだ。

「ひどい！！」

「ひどくないよ。本当に聞きたいだけだ」

そう言って、今度は美雪の頭をポンポンと優しくなでた。

今まで、そんな風に男の人に触られたことはない。
きっとまた顔が赤くなっているに違いなかった。

第6話　一緒に朝食

『お礼に朝食を奢る』

という松沢の申し出を、素直に受けることにした。
本当は自分が手早く朝食の用意でもできればいいのだろうが、買い物に行っていなかったために、冷蔵庫はからっぽだった。
買い物は、普段から週末にまとめて行っているのだから仕方ない。
それに、ほんの少しだけ近くなった松沢との距離が、嬉しくて……。
正直、もう少し一緒に居たかった。

松沢の新しい引っ越し先は、美雪の家からはわりと近い場所だった。
上がって待ってて、という言葉を丁重に断りマンションの下で待っていると、ラフな格好の松沢が下りてきた。

「お待たせ」

振り返ると、スーツ姿とは全然違う松沢がいた。

（やば…かっこいい……）

スーツ姿ももちろん大人で素敵なのだけど、私服姿は違うかっこよさがあった。
普段は自分よりずっとずっと大人に見える松沢が、ジーンズにラフなシャツとコートをはおった姿は、同世代にすら思える。
なんだか、またぐんと身近に思えてしまった。

「何？」

「い、いえ！あの…若くみえますね」

言ってから、しまったと思った。

「悪かったな、普段はおっさんで。行くぞ」

ちょっとぶすっとした顔をして、スタスタと先を行ってしまう。
そんな事を言いたかった訳ではないのに。相変わらず、口下手な自分。
ため息をついて、急いで松沢の後を追った。

まだ早い時間で営業しているお店は少なく、手頃なファーストフードショップに入った。

「いいのか？こんなとこで」

「え、全然いいですよ。主任こそ、朝からファーストフードでイヤじゃないですか？」

「だから年寄り扱いするなよ…」

「あ、そういう意味じゃなくて！」

「わかってるって」

そう言って、レジの前へと促すように美雪の背中に軽く手が触れた。
自然なスキンシップはまるで彼女にでもしているようで、赤くなりながらも嬉しく思う自分がいる。

（きっと…素敵な彼女がいるんだろうな。うらやましいな…）

松沢が選んだ窓際の席に座り、もくもくとハンバーガーを口に運んだ。

何かを話そうと思っても、緊張してしまって話題が浮かばない。

唐突すぎて意識する暇がなかった分、寝起きの方がずっとスムーズに話せた。

私って、つまらない女だ。

せっかく憧れの上司と一緒にいるというのに、面白い話題ひとつ浮かばないなんで。

はぁっと小さくため息をついた。

「なんだよ？ため息なんかついて」

ポテトをつまみながら、ムッとした顔で松沢が言った。

「え？あ…あの…なんでもないです」

慌てて、何かフォローしなくてはと思っても、うまい言葉が浮かばない。

「俺と食事するの、そんなにイヤ？」

「そ、そんな訳ないです！…あんまり…男の人と食事するのに慣れてなくて…緊張しちゃって」

「緊張？」

くすっと松沢が笑った。

「お前、本当に男慣れしてないのな」

会社では苗字でしか呼ばない彼に、『お前』と呼ばれていることになんだかドキッとする。

「……この年になって恥ずかしいんですけど」

「一晩過ごした仲じゃないか」

驚いて顔をあげると、ニヤニヤと笑いながら美雪の顔を見ている。

「ひ、一晩って！その言い方はちょっとどうかと思いますけど」

そう言ってから、ハッと気付いた。

「そういえば……どうして主任私のベットに入ってたんですか？布団敷いたのに」

「え？」

何気なく聞いたのに、意外にも松沢は口ごもった。

「どうしてって…寒かったしなぁ…」

「彼女と間違えたんですか？」

ちょっと胸がちくっとしながらも、なるべく平静を装ってそう聞く。

「……ていうか、そういうこと聞くなら朝のうちだろうが。いまさらだ」

無愛想な顔で口の中へポテトをほおりこむ松沢に、萎縮してしまう。

「そ、そうですけど…なんでかなぁって思っちゃって」

「男が女のベッドに入るのに、理由はひとつじゃねえの？」

にやっと笑って、松沢が言った。

理由…

理由はひとつって…

「そ、それはどういう」

「っていうか、アレ、お前の友達？」

「え？」

松沢に指さされ窓の外に目をやると、美雪の顔が凍りついた。

「ちょ、ちょ、ちょっと待っててください！！」

「え、オイ！」

飲みかけ食べかけのトレイをそのままに、慌てて店の外に飛び出した。

松沢が驚いて立ち上がろうとしているが、かまっていられない。

よりによって……、見られたくない人に見られてしまった。

第7話　不都合な目撃者

「ちょっとぉ～美雪～！誰なのよ！あれがもしかして昨日言ってた彼氏？」

「超かっこいい！あんなイケメンで大人な人、どこで見つけたの！？」

窓の外にいたのは、昨日の飲み会のメンバーでもある短大仲間のさくらと結衣だった。

「あの！これはっ……」

何か言い訳を…と思っても、この状況を上手く説明できるだけの経験とボキャブラリーが美雪にはない。

「こんな朝早くから一緒にいるってことは、もしかして…お泊り？！」

「も～お、言ってくれたらもっと早く帰してあ・げ・た・の・に♪」

両側からガシッと肩を組まれては、身動きがとれない。

二人は確か昨日の飲み会で、彼氏がいない・毎日に刺激がないと言っていた。

なおさら、今の状況が面白くてたまらないのかもしれない。

美雪をよそに店内に目を向け、とびっきりの笑顔で松沢に手を振ってみせた。

「ちょっ、何やってるのよ！」

慌ててその手を押さえようとしたが、1人対2人では勝ち目はない。
「いいじゃ～ん！あんなにかっこよかったら見せたくない気持ちもわかるけどさ～！」
何も知らない松沢は、驚いた顔をしながらもニッコリと笑って軽く手をあげた。
途端に二人は、「キャー！」と黄色い声を上げる。
（うわ、あれが噂のキラースマイル……）
社内ではいつも厳しい顔をして滅多に笑うことはない松沢だが、得意先で見せる笑顔には魅了される人も多いと聞く。
いや、関心してる場合ではない。
「ん！！なんか美雪、男の匂いがする！」
肩を組んでいた結衣が、軽く横にしばった美雪の髪の香りをくんくんと嗅いだ。
「はぁっ！？お、男の匂いって何よ！」
慌てて振りほどこうとしたが、今度は反対側のさくらまでもがくんくんと鼻をならす。
「本当だ。なんていうの？ヘアワックスのようなコロンのような……」
「うぅっ、いいなぁ～！彼氏の匂いがついちゃうなんて！ラブラブ

なんだね～」

「そうかぁ、これがあの大人な彼の香りなのね♪」

二人は、ウンウンと顔を見合わせてうっとりとうなずいている。

昨日、松沢と一緒に寝ていたことで彼の香りがうつってしまったのだろう。

なおさら、言い訳ができなくなってしまった。

「ふ、二人はどうしてこんな時間に…？」

なんとか松沢から関心をそらしたくて、そう聞いてみた。

「飲み会の後も二人で女子トークしてたら、つい盛り上がっちゃったんだよね。ファミレスでオールしてたら、気づけばこんな時間だし。でもおかげでイイモン見れたー」

「あ～あ、瑠璃がいないのが残念！」

「そうだねー、美雪に彼氏ができるはずがないって、一番疑ってたもん」

くされ縁の瑠璃がいないのが、幸いだった。

彼女なら、ずかずかと店内に入って松沢を質問責めにしかねない。

ここは、下手に弁解しない方がいいのかもしれない。

「あ……あのさ…他のみんなには、このこと内緒に…」

しどろもどろにそう言うと、二人はニヤリと顔を見合わせた。

「ふっふっふ。あんなにカッコイイ彼氏じゃ見せたくない気持ちもわかるけどね～。
それはちょーーっと、ずるいんじゃない？」

「え！い、いやそういう訳じゃないんだけど」

「どのみちさぁ～、昨日飲み会で会わせるって言っちゃったんだし。なんとか彼氏説得しなよ。感じよさそうじゃん」

松沢は相変わらず涼しげな顔でコーヒーを飲んでいたが、こちらの視線に気づくとにっこりと微笑んだ。
会社ではあんな笑顔なんか見せないくせに。
なんだか面白がっているようにすら見える。

「ほらほら♪彼氏待たせちゃ悪いしぃ～。私たち行くね！」

「あ、瑠璃に写メを…」

「や！やめて！頼むからそれだけは！！」

携帯をかまえそうになる二人の前に慌てて割って入る。

「じゃあ～、近いうちにまた飲み会セッティングするから、その時には連れてくるんだよー」

キャハハッと笑いながら二人は去っていった。

———まるで、嵐のようだった。

第8話　ギブアンドテイク？

――――どうしよう……

どーんと暗い気持ちになり、ヨロヨロと店内に戻った。

「どうしたんだ？友達か？」

「はぁ…まぁ…」

どすんとイスに腰をおろし、思わず頭を押さえてしまった。

「どうした？」

「あー…いや、なんでもないですから…ホント」

のどが渇いていたことに気付き、一気にオレンジジュースを飲み干した。

「俺のこと、彼氏にでも間違えられたか？」

ぶっとオレンジジュースを吹き出しそうになる。

「げほっ……な、なんで…」

「この時間にこの場所じゃあ、そう思われたって仕方ないだろうな」

しれっとした顔でコーヒーを飲む。

まあ確かに当然だろう。

「別にいいだろ、彼氏に間違えられるくらい。このシチュエーションじゃ、言い訳もできないだろうしな」

松沢はそう言ってくれるが、問題はそこではないのだ。

「なんだよ？そんなに彼氏と思われたのが不服か？」

「は？いっいえ、とんでもない！」

慌てて顔の前で手を振る。

「むしろ……主任に申し訳ないです。私の彼氏になんて間違えられちゃって、困るのは主任の方ですよね。すみません」

「別に俺は困らないけど」

ぶすっとした顔で松沢がそう言った。

“別に困らない”

そう言ってくれたのは、何気にとても嬉しかったけど…今はそれどころではなかった。

なんと答えてよいかわからず、ただ無言でストローの袋をくしゃくしゃと丸めた。

「……なんだよ？お前。俺が彼氏と間違われると、そんなに困ることがあるのか？」

松沢は、怒ったような困ったような、複雑な顔をしていた。

「間違われると、困るヤツでもいるのか？」

「はぁ…えっ！？あ、いやそんな人全然いないです！私が困ったっていうのはそこじゃなくて…」

思わず口がすべった。

「そこじゃなくて？」

「……い、いえ…ええと…別に…」

「なんだよ。言えよ」

ちらりと松沢を見上げると、意外にも怒っているのではなく心配そうな顔をしていた。

呆れられるかもしれない。

女友達に、彼氏がいるって見栄をはったなんて。

でも、はぐらかしたまま帰れる雰囲気でもない。

そして、この場を切り抜けられるようなうまい言い訳も浮かばない。

迷った挙句、仕方なく、ぽつぽつと昨日の飲み会での出来事を話し始めた。

「なんだ、そんなことか」

美雪の簡単な話を聞いた後に、そっけなく松沢はそう言った。

「…まあ女性におモテになる主任にしてみれば『そんなこと』程度なのかもしれないですけど」

むっとして思わず嫌味が出てしまった。

美雪にとっては一大事なのに。

「俺が彼氏として飲み会に行けばいいだろ？」

――――軽く１０秒は思考が停止していた気がする。

「はっ？…え、ええ～～！！」

お店の中だということも忘れて大声を出してしまった。

周りの視線を感じて、思わず縮こまる。

「なんだ？不満か？」

仕事中のようなむすっとした厳しい顔をされては、口答えもできない。

「ふっ不満だなんて、とんでもないです！そうじゃなくて、そんな迷惑をかけるわけには…」

「俺だって昨日の夜、散々迷惑をかけたんだからお互い様だ。恩を売ったままというのは性に合わないんだ」

はた、と気付く。

そうか、昨日の恩返し…と言われると納得がいく。
確かに仕事中も、ギブアンドテイクというか、たとえ身近な部下や上司であっても相手に借りを作るようなことはしない松沢だ。
酔っぱらって道路で眠りこけ、さらに一泊世話になったのが入社1年目の美雪とは…松沢自身が我慢ならないのかもしれない。
それに、女性に不自由なんて決してしないと思われる松沢にとっては、彼氏の『フリ』をすることなんて、なんてことないことなのだろう。

「そ、そっか…昨日の借りってことですね…」

うんうん、と自分に言い聞かせるように頷いた。
これはいいアイデアかもしれない。
どう考えたって、すぐに自分に彼氏ができるとは思えないし、彼氏役を頼めるような男友達だっていない。
一度みんなに会わせてしまえば、すぐに『別れた』と言ってもなんとかなるだろう。

「そ、それじゃあ…あの、お願い…」

言いかけた時に、カウンターの上に置いてあった美雪の携帯が鳴った。

“ 瑠璃 ”

携帯の画面に映る文字に、思わず電源を切ってしまいたくなった。
が、松沢の前でそんな不誠実なこともできない。
一言ことわってから携帯を耳にあてる。

「もしもし……」

店の中ということもあり小さな声でそう言ったが、携帯の向こうからはひどく興奮した声が聞こえてきた。

『ちょっと！！今さくらからメールが来たんだけど、アンタ！男といるんだって！？』

早い。

女の情報網というのは、本当に早い…。

「そ、そうだけど」

『昨日の話、本当だったの？！なんでもっと早く言わないのよ～！』

嬉しいのか、悔しいのか、怒っているのか喜んでいるのかもよくわからない。

「いや、あの、まだ、つ、付き合い始めたばっかりで…」

こんなことを言っていいのだろうか？

ちらっと松沢を見てみると、事情が呑み込めたのか、少しニヤニヤとしながら美雪を見つめている。

「…あの、私ちょっと外に出てきますね」

携帯の受話口を押さえてそう言うと、

「なんで？ここで話せよ」

涼しげにそう言ってくる。
余裕のある態度が、なんだか腹が立つ。
「…瑠璃？ごめん、後から電話するから…」
『今いるの彼氏なんでしょ？ちょっと電話に出しなさいよ～！私まだ信じられないもん！』
「そんな、会ったこともないのにいきなり電話なんて…」
そう言いかけると、ひょいっと松沢は美雪の携帯を取り上げた。
「ちょっちょっと！！主任！」
まあまあ、と手で軽くジェスチャーをすると
「もしもし？ふじ……いや、美雪がお世話になっています。松沢ですが」
出た。
低くて艶のある、キラーボイス。
『キャーー！！ホントだーーーー！！』
瑠璃の悲鳴にも似た絶叫が、携帯の向こうからかすかに聞こえてきた。

第9話　7日間の約束

「あぁ……おはようございます。うん、聞いてます」

「あぁ…うん…いや、会社が一緒で…」

瑠璃は何を言っているのだろう？

隣に座って、携帯に耳をくっつけて会話を聞きたいぐらいだ。

「来週？いや、大丈夫だと思う…」

“もう切ってください！”

必死で、電話を切るようにジェスチャーを送る。

「あ…ごめんね、詳しくは美雪から。じゃあ」

松沢は余裕の表情で、携帯を返してきた。

「ハイ、“美雪”」

「っ…なんですか、それ！」

赤くなりながらも、とりあえず携帯を耳にあてる。

「もしもし瑠璃？もう切るよ。後でまた…」

『ちょっとぉ～、本当だったんだね！いやー信じられないわ』

「これでわかったでしょ？」

半分ほっとする。

これで、わざわざ飲み会に出てもらわなくてもいいかもしれない。

「じゃあ、またね。そのうち連絡するから」

『うん！じゃあ一週間後にね～♪』

……一週間後？

“？？？？”が頭に並んだが、携帯はすぐに切れてしまった。

「あの…どうもすみません…」

「いや、いいよ。若い子って感じで元気があっていいな」

相変わらずニヤニヤしながら、松沢はそう言った。

何かイヤな予感がした。

「あの…瑠璃、なんか言ってました…？」

「昨日の飲み会のこと言ってたよ」

「それ以外に、何か…一週間後とかなんとか…」

「一週間後、新年あけて早々に新年会もかねて飲み会開くってさ。

来てくれって言ってた」

それか！！

「そ、そんな…主任、なんて言ったんですか？」
「大丈夫だと思う、って」
しれっと言う。
「なんだったらお友達も一緒に、って言ってたぞ」
「えぇっ！なんて図々しい…って、そうじゃなくて！」
松沢はたいして気にとめてない様子だったが、美雪はそれどころではなかった。
「あの…行くんですか？」
「行くって、さっき言わなかったっけ？」
「そ、そうですけど…一週間後なんて、そんな急な…」
飲み会に出てくれとお願いする気ではいたものの、こんなに早く話が進むとは。
むしろ瑠璃との電話で、飲み会の話は流れてもいいだろうと思っていたのに。
「早い方がいいだろ」
相変わらず表情も変えず、コーヒーを飲みながら松沢が言った。
———そうか。

松沢にとっては、こんな面倒なことは早くすませてしまった方がいいのだろう。
部下に借りを作ったままでは仕事もやりにくいだろうし、彼氏のフリをするという約束など、負担でしかないに違いない。
こうやって一緒にいることを嬉しく思っているのだって、自分だけなのだ。

「そうですね。早い方がいいですね。ご迷惑をおかけしますが、お願いしてもいいですか？」

少しだけ悲しくなった気持ちを隠すように、冷静にお願いをした。

「……わかった。一週間後だな」

そう言って、松沢は美雪の目をまっすぐに見つめた。

「7日間、お前の彼氏になってやるよ」

急に、自分の鼓動が早くなったのがわかった。
こんな素敵な人にまっすぐにそう言われて、ドキドキしないでいる方が無理だ。
“7日間”という、限定期間さえなかったら…
そんな考えを振り払うように、勢いよく頭を下げた。

「よっ…よろしくお願いします！主任！」

松沢が、ぷっと吹きだした。

「お前……“主任”はないだろ、“主任は”」

「あ、でもなんて呼べば……」

「俺の名前、知らない？」

「し、知ってますけど……む・無理！無理です！」

慌てて顔の前で手を振る。

「だ、大丈夫です！飲み会の時にはちゃんと…」

「無理だろ。お前、そんなに器用か？」

見透かされている。

「う…でも、いきなり名前は無理です…ホント」

「7日間でなんとかするしかないな。お前のあの友達の様子じゃ、つっこまれまくりだぞ」

電話で少し話しただけなのに、さすが松沢だ。

「せめて会社の外にいるときに“主任”はやめろ。苗字でもいいから」

「はい……松沢さん」

素直にそう言った。

「ちゃんと呼べるようになれよ」

テーブルの向こうから手を伸ばして、くしゃくしゃと美雪の頭を撫でた。

彼氏って…こんな感じなの？

慣れないスキンシップに、顔がにやけそうになる。

（思いあがっちゃいけない…7日間だけだから、主任は借りを返すだけなんだから）

心の中で自分に言い聞かせる。

「そろそろ出るか」

「はい」

松沢の後をついて店を出ようとした時、美雪の携帯が再び鳴った。

「あ、平岡さんだ…」

出ようとすると、むっとした顔で松沢が携帯を取り上げた。

「あっ！ちょっと！」

美雪の制止も聞かず、松沢は通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

「もしもし？俺」

「！！松沢さん？！」

美雪の携帯に、勝手に出る理由がわからない。

というか、この時間に松沢が電話に出て、どういう説明をするつもりなのだ。

慌てて携帯を取ろうとしたら、“うるさい”と言わんばかりに怒った顔をされる。

「ああ、昨日は悪かった。…うん、今一緒にいるよ」

（まあ元々主任のお友達なんだから、仕方ないのかもしれないけど――）

「別にいいだろ。俺たち、付き合うことになったから」

一瞬、耳を疑った。

「邪魔するなよ、じゃあな」

ポチッと電源ボタンを押して、ぽいっと携帯を渡してきた。

「！！！なんでっ？！そんなことワザワザ…」

「お前の友達が、俺の友達も連れてこいって言ってただろ？だから」

そう言われては何も言えない。

「……文句ある？」

「いっいえ……失礼しました」

文句を言える立場ではない。

むしろ、お礼を言わなければいけないくらいかもしれないのだ。

なんだか色々と腑に落ちないが、ひとまず黙って携帯をポケットにしまった。

「ふぁ～～！やっぱりちょっと眠いな」

店の外に出て太陽を浴びると、松沢は大きく伸びをした。

昨日は随分ぐっすりと眠っていたようですけど。

喉まで出かかった言葉を、ぐっと飲み込む。

そういえば、どうして自分のベッドに入ってきたのか…聞きそびれてしまった。

「今日はさすがに帰るけど…お前、明日予定ある？」

「明日ですか？いえ、特に……」

「デートするか」

「ふえっ？」

頭に優しく手を載せられて、思わず変な声が出てしまった。

「デ・デートですか？」

「お前、男に免疫なさすぎ。このままだったら、友達にバレバレだぞ」

それは…そうかもしれない。

それでもなんだか信じられない気持ちで、松沢の顔を見上げた。

「誘って、くれてるんですか？」

「7日間だけど、俺は彼氏なんだろ？」

美雪の顔を見下ろしながら、松沢がふっと笑った。

会社では見せることのないその優しい表情に、ドキッとする。

7日間だけ……この状態を楽しんでもいいだろうか？

出会いもなく男の人とも上手く話せない自分が、こんなに素敵な彼氏ができる日なんて、きっと来ないから…

一生の想い出かも。

「あの……はい、お願いします」

「いいの？」

「はい」

意外にも嬉しそうな松沢の顔を見て、美雪の胸が痛いくらいに高鳴っていた。

番外編1　初めてのお宅訪問（前書き）

大輔視点です。

番外編1　初めてのお宅訪問

「うー……緊張する……」

レンタカーの助手席で、苦しげな言葉を吐いた美雪が膝にゴツンと頭をつけた。

「何もそこまで……」

あきれ顔でそう言うが、どうしてやることもできない。
せめてと思い頭をぽんぽんと撫でるが、美雪の頭はぴくりとも動かない。

「どうしよう、私、今日の服、変じゃないんですか？」

「だから、大丈夫だって」

大輔にしてみたら、どうして美雪がここまで緊張しているのかがわからない。
男が女性の家族に結婚の報告をしに行くことを考えたら、ずっと気楽なはずだ。

「なんでそんなに緊張するんだよ。ずっとわかってたことだろ？」

「わ、わかってはいましたけど……彼氏の家に行くのだって初めてなのに、それが結婚の報告って……どんだけですか！　大輔さん、家族には私のこと言ってないとか言うし！」

がばっと顔を上げた美雪が、涙目で訴えてきた。

「わかってたら、ちゃんと話してって言ったのにぃぃ！」

どうやら緊張の原因はそこらしい。

大輔にしてみたら、三十路前の男がわざわざ飛行機に乗ってまで彼女を連れて行くとなると、家族が期待してかまえているのは当たり前のように思えた。

むしろ、『結婚はまだ考えてない』とでも言う方が酷だ。

何も言わなくてもわかっているから大丈夫――そう言おうとして、その言葉がどう転ぶかわからず口をつぐむ。

「大丈夫だって。今日は弟もいるって言ってたし」

「え、大輔さん弟いたんですか！」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「聞いてないです～～～！」

それは聞かないお前が悪い、とは言えず、もはや黙って車を走らせた。

「ただいま、連れてきた」

気軽に玄関を開けて中に入ると、待ちかまえていたかのように母親と弟が飛び出してきた。

「おかえりにいちゃん！」

「あらあら！　ちょっと本当に彼女いたのね～！」

二人の好奇な視線に晒され、美雪がさらに身体を硬くする。

「は、初めましてっ！　あの、ふ、藤崎美雪と申します……」

菓子折りの入った紙袋を手に深々と頭を下げる美雪に無遠慮な視線を投げながらも、にやにやと弟の浩輔が大輔を見た。

「……なんだよ」

「いや～、この方が俺の将来のお姉さまかと」

頭を上げた美雪が、びきっと顔を固まらせた。

「ばーか。お前より３つも下だぞ」

「え、つうことは２１？！　ちょ、にいちゃんそれ犯罪！」

うるせえ、と呟くと、まあまあと母親が間に入った。

「こんなとこで話してないで。美雪ちゃん？　とにかく上がってね」

にっこりと微笑む母親に安心したのか、ようやく美雪がほっとしたような笑顔を見せた。

「藤崎美雪さん。転勤する前……一緒に働いてたんだ。結婚しようと思ってるから」

唐突に告げた言葉に母親は目を見開き、弟はひゅうっと低く口笛を吹いた。

「浩輔、行儀悪い！　大輔、そんな大事な話……お父さんが帰ってくるまで待ってたっていいでしょう」

「どうせ聞きたかっただろ」

顔を赤くした美雪が、不安そうに見守っている。

「でもそんな急に……え、まさかアンタ、もしかして……」

「違うって。早とちりすんなよ」

母親が美雪の腹部をまじまじと見つめたのに気付いて、慌てて話を区切る。

「今は俺も大阪で離れてるし、すぐ結婚って訳じゃない。でもいい機会だから、そういうつもりで付き合ってる相手がいるって紹介しようと思って連れてきただけだ」

「あ、そうなの。びっくりしちゃった……一瞬孫が出来るのかと嬉しくなったのに」

「母さん！」

ほほほっとわざとらしい笑いを浮かべながら、母親が美雪へと向き

直り頭を下げた。

「美雪ちゃん、この通りぶっきらぼうで愛想のないやつだけど……どうかよろしくねー」

「あ、いえっ、とんでもないです……」

慌てて頭を下げた美雪を見て満足そうに目尻を下げながら、お盆を抱えた母親が立ち上がった。

「うちは男二人だから、女の子が欲しくてね～。大輔は全然結婚する気なみたいだから、浩輔に期待してたんだけど……本当嬉しいわ～」

「そうなんですか……」

「向こうに住んでるからなかなか会うこともできないだろうけど、大輔が帰ってくる時には一緒に来てね」

ハイ、と小さく答えながら頷く美雪の目がなんだか潤んでいて、それをニヤニヤと見つめる弟の足を強く蹴った。

『大輔さんの部屋が見たい』

そう言われて断る理由も見当たらず、二階にある自分が使っていた部屋へと案内していた。

大輔の部屋とはいっても、主要なものは大学進学と同時に運び出し

ている。
実家に帰ってきたときには寝る部屋として使ってはいるが、もう自分の部屋と呼ぶのも微妙な感じだ。
それでも美雪は嬉しそうに部屋を見渡し、本棚に残してあった高校時代に流行っていた漫画を取り出したりしている。

「緊張した？」

壁によしかかったまま美雪を見つめる。
くるりとこちらを振り返った美雪が、困ったように微笑んだ。

「そりゃ、当然……でも、なんか受け入れてもらえたって感じで嬉しいです。あ、でもお父さんがまだですね」

「父さんは……まあ、俺みたいな感じかな」

必要なことはあまり話さず、どちらかという寡黙で無愛想な父親だった。
見た目も性格も大輔は父親似で、明るくあっけらかんとした性格の弟はあきらかに母親の血が濃い。

「えー、それ怖いです」

ふふっと小さく笑って美雪が本棚に漫画を戻した。

「ここで大輔さんが、育ったんですねー」

「育ったって」

「あ、この写真……大輔さん、バスケ部だったんですか？　漫画も

たくさんあるし」

壁に飾られたままだった部活の集合写真を見て、美雪がはしゃいだ声をあげた。

「わー……大輔さん、なんか変わらない。大人っぽい高校生ですね。モテそう」

「お前は何部だったんだ？」

「私？　吹奏楽部ですけど」

「だろうな……運動部ではないとは思ってた」

「それどういう意味ですかー？」

眉に皺をよせながらこちらを睨むのが可愛くて、思わず美雪の手を握り身体を引き寄せる。

「……ダメですってば」

「何もしないって」

高校生の頃まで使っていたベッドでもあればよかったのかもしれないけれど、『場所を取るから』というシンプルな理由で就職と同時に処分されてしまっていた。

壁に寄りかかったまま抱き締めると、ダメと言っていたわりに美雪は顔を大輔の胸へと押しつけていた。

「あれ、ダメなんじゃなかったの？」

「……意地悪」

軽く口を尖らせながら、大輔を見上げる。

「緊張したんです、すっごく」

「うん」

「だから……ちょっと安心して」

返事をする代わりに、頬を美雪の頭に押し付けた。
軽く脱力している様子は、家族に会うという第一段階の緊張がひとまず抜けたせいだろう。

頬に当たるふわふわと柔らかい髪が、心地いい。
無防備に大輔へと投げ出される身体が、愛しい。

こんな風に思える女性が現れたことに、一番驚いているのは大輔かもしれない。

「美雪」

「え？」

見上げた小さな顔に手を添え、優しくキスを落とす。
一瞬驚いた顔をしつつも、目を閉じてそれを受け入れてくれるのが嬉しくて。

「ええと、あの。そういう事はドア閉めてやったら？」

半開きのドアから覗く、弟の出現に気付けなかった。

「いや邪魔をしないように静かに上がってきた俺も悪いけどね。ハイ、にいちゃん携帯。平岡さんから着信あったよ」

「……ああ、悪い」

居間に携帯が置きっぱなしだったのがまずかった。差し出されたそれを受け取り、兄の威厳で冷静さを装うのがやっとだった。

「じゃあ、文字どおりお邪魔しました。ごゆっくり～」

トントンと軽快な足音が遠ざかる間、美雪は大輔の腕の中でわなわなと震えていた。

「まあ……気にするな」

「き、気にします！」

うわーん！　と美雪が大輔の胸に顔を押しあてた。

「どうしようどうしよう、これが初日の出来事なんて、恥ずかしすぎる…！」

「だから気にするなって。大丈夫、母さんには言わないと思うから」
「いっ言われたら！　そんなのもう……」
「“お嫁にいけない？”」
ぴくっと動きを止めた美雪が、そろそろと大輔を見上げた。
「お嫁には……いきます……」
「そうか。責任はとろう」
背中にまわした手を、ぽんぽんと叩いた。
なんだか納得のいかない顔をしながら、美雪が身体を離す。
「あー、どうしよう、恥ずかしすぎて死にたい……下に降りられない……」
さっきまで赤くなっていた頬は、今度は血の気を失っている。
「大丈夫だって。下に降りないと、平岡と麻友のとこにも行けないぞ」
平岡からの電話は、きっと実家についたことの確認だろう。
麻友の実家で、美雪のためにケーキやお菓子を揃えているに違いない。
美雪と同じく一人っ子の麻友は、美雪のことをまるで妹のように可愛がっている。
平岡が3人の関係を話したことで、美雪が変に麻友を意識したり卑屈になったりはしないかと心配していたが、美雪にとって麻友は「

彼氏の友人の奥さん」というポジションから動かないらしい。
それほど今の平岡と麻友が幸せそうでもあり、大輔と美雪が幸せなのもあると信じている。

「う……それは……行きます」

甘い誘惑に負けたのか、美雪ががっくりと項垂れた。

「もっと気楽にかまえろって。お前の弟になるんだぞ」

「えっ！」

「そうだろ？　どうする？　“お姉さん”って呼ばせるか？」

「い、いや……それはちょっと無理っていうか。え、でもやっぱりそれが筋ってもんですか？」

違う悩みに支配されたらしい美雪に、笑って手を差し伸べた。

「とりあえず行くぞ。平岡たちが待ってるよ。報告もしないと」

「あ……はい！」

きっとこの報告を、平岡と麻友は自分のことのように喜んでくれるだろう。
階段を下りる途中、もう一度振り返って素早くキスをする。

「幸せになろうな」

「はい……」

赤い顔で困ったように笑う美雪が可愛くて、抱き締めるのを堪えて手を強く握る。
クールで冷たいと言われていた自分がここまで変わるとは、思ってもいなかった。それは家族や友人にとっても、きっと同じだろう。
でも、悪くないと思う。

浩輔の前で終始うつむく美雪に母親が怪訝な顔をして、結局バレてしまったのは――気にしないことにした。

番外編１　＜完＞

番外編2　恋の予感??（前書き）

美雪の友人、瑠璃視点です。

番外編2　恋の予感??

残業を終え、制服から私服に着替えてから携帯を確認すると、着信履歴に『美雪』の名前が二度も並んでいた。
昼休みに電話をかけたのは瑠璃の方だったけれど、美雪が電話に出ることはなかった。きっと着信履歴を見て、かけてくれたのだろう。
会社の外に出てから美雪へ電話をかけると、ワンコールで彼女へと繋がる。

『もしもし、瑠璃?』

明るくて可愛らしい声が、耳元で響く。

「久しぶり〜、花嫁さん」

『ちょっと、やめてよそれ……』

そう言いつつも嬉しそうな声色は変わらない。

『ごめんね、お昼に電話もらってたの気付かなくて。仕事終わってすぐ電話したんだけど……。瑠璃は今まで残業だったの?』

「あーうん。本当はもっと早く追われる予定で、美雪に昼休みに電話したんだけどね」

美雪の背後からはガヤガヤと騒がしい声がうっすら聞こえてくる。

「もしかしてどこかで飲んでるの?」

『うん。大輔さんが出張でこっちにきてて、会社のお友達と一緒に呑んでるの。瑠璃、なんか用事でもあった？』

「いやいや、美雪の残り少ない独身生活を楽しもうと、ご飯でもどうかと思ったんだけどねー。急な残業入っちゃって時間も時間だし、今日はやめておくよ」

本当はそれが目的ではなく、仲間うちで美雪に送る予定の結婚祝い品のさぐりをいれるつもりだった。
しかし、彼女が会社の人と飲みに行っているのなら、別の日の方がいいだろう。
美雪と大輔の結婚式の予定はまだ半年以上先だというし、焦る必要はない。

「まあそのうち、美雪が空いてる日にでも夜ご飯食べに行こうよ。じゃね」

『あ！　ちょっと待って瑠璃。今一人？』

「そうだけど」

『よかったらこれからちょっと来ないかって。大輔さんと、お友達が』

え、と一瞬固まった。
場所を聞いてみると、瑠璃の会社からほど近い場所だと言うこともわかった。

『嫌だったらいいんだけど……どうかな？』

躊躇うような美雪の声が聞こえる。

「うーん、行ってもいいんだけど、お邪魔じゃない？」

『大丈夫大丈夫、大輔さんもお友達も会いたいって』

迷う気持ちがあったが、場違いな飲み会に呼びつけるほど空気の読めない友人ではない。

「わかった。行くよ。お店迷ったらまた電話するから」

『本当！　嬉しい、じゃ待ってるね！』

友人に素直にそう言われて、嬉しくない訳がない。

早速携帯で地図検索のアプリを立ち上げ、店の名前を入力した。

「あ、こっちこっち！」

がらりと居酒屋の引き戸を開けると、すぐさま美雪が立ち上がり手を振った。

瑠璃が来ることをわかって、ずっと入口を気にしていたのだろう。

かわいいやつめ、と心の中で呟く。

ひらひらと手を振る美雪の側に近付くと、涼しげなイイ男が隣にぴったりと寄り添っている。

「こんばんは、瑠璃ちゃん」

「お久しぶりです〜、松沢さん。この度はご婚約おめでとうございまーす」

相変わらず、クラクラするほどの色気だ。
それをなんとも思わないのか、隣の美雪はニコニコと微笑んでいる。
幸せそうなその光景に頬が緩んだ時、大輔の前に座っていた栗色の髪が、ゆっくりとこちらを振り返った。

この男は――。

「あ、こちら営業課の盛永さん。大輔さんの同期なの」

「初めまして。瑠璃ちゃん？　盛永と言います。よろしくね」

爽やかな笑顔に答えるように、薄い笑顔を顔に貼り付ける。

「どーもー。美雪の友人の瑠璃でーす」

４人掛けのテーブルに仲良く並ぶ美雪と大輔、そして大輔の向かい側にはこの盛永と名乗った男。これはどう考えても自分は、この男の隣に座らないといけないらしい。
ため息をつきたい気持ちをこらえて、少し離れ気味に盛永の隣に腰を下ろした。

「瑠璃？　ごめんね、急に呼んじゃって……」

瑠璃が顔に貼り付けていた作り笑いに気付いたのか、申し訳なさそうな顔をした美雪がこちらを伺っていた。

「あ、ううん、ぜんぜーん。元々は私から誘おうとしてたんだし……」

「さっきまで私の先輩もいたんだけどね。急用が出来ちゃったみたいで帰っちゃったんだ～」

柔らかい雰囲気の彼女の左手には、見慣れない指輪が光っている。

「それ、もしかして婚約指輪～？」

ニヤニヤしながら指をさすと、ぱっと左手を押えて美雪が頬を赤く染めた。

「あ……うん、一応……」

「オイ、一応ってなんだよ」

「や、別にそういう意味じゃ」

途端に隣の大輔からからかうような声が飛び、慌てたように美雪が大輔を見上げる。

（いいなあ）

全く知らない他人だったら、“バカップル”と言ってしまいたくなるその光景だが、長年彼氏もいなく男そのものを拒絶していた友人となると話は別だ。

無意識にこちらの頬も緩む。

「美雪、本当幸せそうだね」

「や、ちょっと瑠璃までなんなの？！」

さらに顔を赤くした美雪が、瑠璃と大輔の顔を交互に見比べた。

「結婚式の予定とは、どうなってるんですか～？」

「まだこれからかな。佐々木くんと理子ちゃんが式をしたところもいいと思うんだけど……招待するのは会社関係者が多いしね。やっぱこっちでやる予定」

大輔の転勤によって、二人が離れてしまってから1年がたつ。美雪曰く、彼の必死の努力のかいあって秋には再びこちらに戻ってこられることが内定しているらしい。

大輔がこちらに戻り次第を籍を入れ、年内に挙式をするつもりだと聞かされたのは最近で、理子に続く二人目のゴールインに仲間みんなが喜んでいた。

「楽しみだな～。美雪が純白のドレスでヴァージンロードを歩く姿！」

にやにやと美雪を見つめると、美雪がきょとんと首を傾げた。

「え……私、ヴァージンロードは歩かないよ」

「え？　なんで！？」

「神社だもん」

「うえっ、意外だな〜！　藤崎さんは絶対チャペル派だと思ってたのに」

盛永が大袈裟にのけぞって見せた。

チャペル派ってなんだ、と心の中で盛永に突っ込みを入れつつも、瑠璃も意外だと思う気持ちは隠せない。

「どうして神前にしたの？」

「えっと……大輔さんの、袴姿が見たくて」

にっこりと笑いながら言った言葉は威力抜群で、大輔が首を赤くして横を向いた。

「へえ……」

目を細めながら、ニヤニヤと盛永が大輔を見つめている。

「……なんだよ」

「いやいや、さすがの松沢も藤崎さんの前では形無しだなぁ〜っと思ってさ」

「俺だって美雪の白無垢が見たいからいいんだよ。ドレスは披露宴で見られるし」

さらりと惚気られ、うっと言葉が詰まる。

「ごちそうさま……」

背もたれにもたれかかった盛永が、ぱたぱたと顔を仰ぐジェスチャーをした。

「あ！　そういえばさ、二次会のセッティングに、藤崎さんのお友達の誰かと連絡が取れると助かるんだけど……藤崎さん側の仕切り役って、決まってる？」

ふいに盛永が身を乗り出した。

「あー、それが……」

もごもごと口ごもり、美雪が視線を彷徨わせた。

「どうしたの？　確か理子がやるって張り切ってたよね？」

運ばれてきた焼酎に口をつけながら、美雪に尋ねる。

「うーん、まだ言わないでって言われてたから秘密にしてほしいんだけど……理子、おめでたなんだって」

「え、本当？！」

「うん。だけどつわりもあるみたいで……大事な身体だし、ちょっと手伝いはできないかもしれないってメールが来てたんだ。みんなには、もう少し落ち着いてから話すって」

相次ぐおめでたい話は喜ばしいが、その状況で二次会の仕切り役は無理だろう。

「そっか。嬉しい話だけど……それじゃあ理子は難しいね」

「そうなの。あ、瑠璃、どうかな？」

「え、私？　二次会のセッティングなんてしたことないけど……」

「あ、それはホラ、俺も一緒にやるし大丈夫だよ」

ちらりと隣に座る盛永に視線を送ると、盛永は愛想よくニコリと微笑んだ。

それは、自分の魅力をよく知っている者特有の笑い方で、少しだけ嫌悪がわく。

「仕事忙しかったら、無理しなくてもいいよ！　他にも頼めそうな人はいると思うから」

空気を読んだのか、美雪が慌てて瑠璃に目配せをした。

「ううん、いいよ。大丈夫」

別に美雪を困らせたい訳ではない。

ここは大人な対応をしなくては。

「そう？　じゃ早速連絡先交換しようよ～」

ニッコリと笑顔で携帯を取り出した盛永につられて、渋々携帯を取り出す。

「盛永」

突然、大輔が鋭い一言を発した。

「な、なんだよ」

「瑠璃ちゃんは、美雪の大事な友達だから。その辺、よーく覚えとけよ」

「……」

（うわ、たかが友達に対してそのセリフ……）

こっちが無意味に赤面してしまう。

「わかってるっつの」

盛永が口角をひきつらせ、ため息をついた。

結局、盛永とは連絡先を交換しただけとくに話が盛り上がる訳でもなく、しばらくしてからお開きということになった。

大輔は今日帰ってきたばかりだというし、あまり引きとめる訳にもいかない。

「じゃあまたそのうち、今度はゆっくり女同士で」

「うん、突然ごめんねー」

ほんの少し滲ませた嫌味にも気付く様子はなく、美雪はただ微笑む

ばかりだ。
さり気なく隣に寄りそう大輔の手には、美雪の手が絡んでいる。
「じゃあまたね！」
（あーあ、マジでいいなー）
タクシーに乗り込んだ二人を手をふって見送っていると、隣にいた盛永が声をかけてきた。
「瑠璃ちゃん、このまま帰るの？　よかったらお近づきの印にもう一軒どう？」
「え、いいです。今ならまだ終電間に合いますし」
露骨に嫌な顔をしたのがバレてしまったようで、盛永は怪訝な顔をした。
「あのさ……俺、瑠璃ちゃんになんかした？」
「いえ、私には別に」
「え、私にはってなに？」
「……やっぱり覚えてないんですね」
深くため息と吐くと、盛永は慌てたように瑠璃の顔を覗きこんだ。
「ちょ、待って本当に。もしかして……どっかで会ったことあった？！」

「もう3年くらい前になりますけど……私、盛永さんと合コンしたことあるんですよねー」

ひくっと盛永の顔がひきつった。

「それ待って。マジで？」

「ハイ。短大の時です」

うーんと盛永が腕を組んで瑠璃をマジマジと見つめた。

「ごめん、マジで……思いだせない。瑠璃ちゃんみたいな綺麗な子、忘れるとは思えないんだけど……」

「私は直接話してないですから。っていうか、盛永さんは女の子に囲まれてたから無理ないとは思いますけどー。安心してください、そこに美雪はいませんでしたから」

自他ともに認める姉御肌で、合コンの時は幹事や仕切り役になることが多い。

悲しいかな、自分の出会いには手が回らない。

だから――『素敵だな』、と思っても、大人数の合コンでは盛永の隣に座ることはできなかった。

「ん？　ちょっと待って。じゃあどうして話してもいないのに瑠璃ちゃん俺に冷たいの？」

「そこまで説明しないとダメですか？」

呆れたようにため息をついた。

「その合コンで知り合った女の子……っていうか、私の短大時代の友達ですけど。彼女に盛永さん、随分冷たくしましたよね？」

「え」

目を丸くして瑠璃を見つめていた盛永が、何かを思いだしたように大きく見開かれた。

「わかった……もしかしてその子って……短大生の……」

ぽつりと盛永の口から呟かれた名前に、瑠璃はこくりと頷いた。

「思い出していただけましたか？」

「思い出した、思い出したけど……ちょい待て、それは俺にも言い分がある」

冷めた目で一歩後ろへと下がった瑠璃の手を、がしっと盛永が掴んだ。

「確かに冷たくしたかもしれないけど、社会人としての俺の立場を全く無視してたのはアッチの方だ。そもそも付き合うとかそういう関係になったわけではないし」

「うわ、遊び人の言いそうなセリフ」

思わずぶんぶんと盛永の手を振りほどく。

「とにかく！　彼女は随分傷ついてたんです。挙句、合コンを企画したこっちまで責められて……あれ以来、私年上の男はキライになったんで」

嫌みなくらいの作り笑いを浮かべて、瑠璃は盛永からさらに距離を置いた。

「大事な友達の結婚式ですから、二次会の件では精いっぱいご協力します。でも……それ以外でお近づきになることはないと思いますので。それじゃ」

捨て台詞を吐いて、くるりと盛永に背を向けた。
こういうタイプの男は大抵プライドが高い。ここまで言っておけば、これ以上近づくこともないだろう。

本当は合コンで見かけて一目ぼれをしそうになって、自分の友達が接近したことで敗北感を味わい、さらに彼女から随分と悪口を聞かされて傷ついたなんて――絶対に言うもんか。

「おい」

早足で立ち去ろうとした瑠璃の肩を、盛永が掴んだ。その声は、びっくりするほど低い。

うわ、もしかして怒らせちゃった――？

恐る恐る振り向いてみたが、盛永の顔は笑って――いや、笑っているのは口元だけで、目は笑っていない。

言いすぎだだろうか。背中にヒヤリとした汗がつたう。

「いいね。俺、そういうハッキリ物を言う威勢のいい子って大好き」

「……はぁ？」

「君まで余計なとばっちりをくらったのだとしたら、それは謝る。でも、だからってこっちの言い分も聞かずに一方的に責めるのはあんまりじゃないか？」

「な、なにいって……」

「フェアじゃないってことだよ。そんなんで俺を評価してほしくないなー」

盛永の顔には、妖しい笑みが浮かんでいた。

「君は片方の一方的に言い訳を聞いてそれを信じちゃうくらい、浅い人間なのかなー？」

「あ、浅いってどういう意味ですか！　失礼です！」

思わず声を荒げて盛永を睨む。しかし彼は全く動じないどころか、嬉しそうに目を細めている。

「じゃあそういう訳で。今日は帰るけど、今度二次会会場の下見に一緒に行こうね♪」

「そんなの一人で行ってください！」

「いいのぉ～？　大事な友達の二次会会場の下見もしないなんて……瑠璃ちゃんはそんな子だったのかぁ～」

「っ……」

盛永はニヤニヤしながら瑠璃の反応を見ている。楽しんでる、絶対に。

わかっていても、引き下がれない。

「わかりましたよ！　行けばいいんでしょ！！」

「そうそう、行ってくれたらいいんだよー。じゃ、メールするね。楽しみにしてるから～」

くすくすと笑った後、盛永はタクシーに乗り込んだ。

窓越しにひらひらと手を振る姿に、思いっきり眉をしかめる。

（やっぱりチャラ男じゃん！）

走り去ったタクシーに、瑠璃はイーッと歯を向けた。

「おい、盛永」

翌日。営業部に顔を出した大輔が盛永を呼びとめた。

「おー、昨日はどーもなー」

「お前……ちゃんと瑠璃ちゃん帰したか？」

「何言ってんの、当たり前じゃん」

へらっと盛永が笑う。

「……わかってるんだよ、お前の好みは」

正式に美雪と付き合うことになったと盛永に伝えたとき、『いいなーあんな年下！』と随分うらやましがられた。美雪の友達を紹介しろと随分ねだられ、とりあえずどんな子が好みなのかと聞いてみたら、返ってきた言葉は

『気の強い子！』

だった。

「わかってるならいいじゃーん。紹介してくれてありがとう。感謝するよ」

「別に紹介した訳じゃねえ！　……頼むから俺の結婚式が終わるまでは手を出すなよ」

「どーかなー。俺も一週間くらいなら我慢できるんだけどなー」

珍しく、大輔の顔に朱が差した。

二人のなれそめは――送別会でしたたかに酔った大輔から入手済みだった。

「……マジでお前、適当に手、出すなよ。ちゃんと考えろよ……」

大輔が低い声で唸るように言い、くるりと背を向けた。
「わかってるってー。俺だってお前みたいに穏やかな幸せが欲しいしー」
「うるせぇ！」
怒って立ち去る大輔の背中を見て、盛永は笑いを堪えていた。
好みにどんぴしゃと言ってしまえばそれまでだが、『穏やかな幸せが欲しい』と言ったのも嘘ではない。
美雪との付き合いを周りアピールし出してからの大輔の努力は大したもので、成績はめざましく伸びてきていた。業績不振だった大阪支社を立て直した功績は大きく、秋に本社に戻る時には役職がひとつあがることは間違いないだろう。
そこには、やはり美雪の存在が大きい。
（俺だってそろそろ……本気になれる相手に出会いたいんだけどな）
その時、胸ポケットに入れておいた携帯が震えてメールの着信を知らせた。
画面を開き、送信者の名前を確認して軽く目を見開く。
“木村瑠璃”
『今日の夜、早速メシでもどうですか？』とメールを送ったのは自分の方だが、まさか返事が来るとは思わなかったが――
『行くか！　チャラ男！！』

「ぶっ！！！」

返ってきたメールに思わず噴き出す。

「どうしたんですか？　盛永さん？」

「あー、いや、なんでもない……」

不思議そうに声をかけてきた事務の女の子に、笑いをこらえてにっこりと微笑む。

（この会社では、俺、優しい方のイケメンで通ってるのにな）

ちなみに、“クールな方のイケメン”は言うまでもなく大輔だ。

なんて返事を出してやろうかと思うと、顔がにやけた。

面白い相手が出来た。もちろん遊び相手という訳ではないけれど。

これが恋になるのかは――、まだ誰にもわからない。

番外編２　＜完＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0650t/

7日間彼氏

2011年11月8日00時58分発行